



AMBOISE
CHÂTEAU ROYAL

見学用パンフレット





アンボワーズ王城へようこそ

見学者の方々、歴史的遺産の愛好家の方々、皆様がアンボワーズ城を見学されることが、サン・ルイ財団によるフランスの歴史を代表する旧跡の保存とイメージ向上に貢献しております。

19世紀から一般に公開されているアンボワーズ王城では、バッジを付けた案内の係員がいつでもお客様のご要望に応じます。

当城の見学が、お客様にとって素晴らしいひとときとなりますように。

当城の見学前に知っておきたいこと

アクセスについて

快適に見学することのできるよう、上の階に上る前に、ベビーカーは守衛の通路（囲いの近く）に置いておくことをお勧めいたします。見学の終了後、同じ場所にてベビーカーを受け取ることができます。居住棟の見学後は、庭園をゆったりと散歩することができます（表紙の地図を御覧ください）。庭園には勾配が10%を超える箇所があります。

当城にご到着になりましたら、以下の見学用機器をご提案いたします：12言語用意されているHistopad®（イストパッド）、あるいは視覚障害者向け見学コースのフランス語と英語のオーディオガイドをご使用になれます。追加料金はかかりません。

居住棟入口の衛兵の間に、手で触れることのできる模型が展示されています。オーディオガイドの各場面の始まりが分かりやすいよう、フランス語と英語でアナウンスが収録されています。居住棟の中では、各部屋の係員から許可を得た上で、一部のコレクションに触れることが可能です。

当城に到着されましたら、居住棟での係員による誘導をご要望ください。係員は、居住棟の1階と2階への順路をご案内いたします。車椅子もご利用になれます（ただし、数に限りがございます）。Histopad®（イストパッド）の遠隔操作機能を使って、身体障害者にはアクセス不可能な3階部のコレクションについて説明を得ることができます。王族の居住棟内には、お客様が快適に見学できますよう、ベンチが設置されています。居住棟の見学後は、庭園をゆったりと散歩することができます（表紙の地図を御覧ください）。庭園には勾配が10%を超える箇所がありますので、付き添いの方が必要となります。

オランジュリー内に、特別に整備されたトイレがございます。パンサーージュの中庭（cour de Pansage）のエレベーターをご利用になってアクセスしてください（レベル1の階）。このエレベーターによってカフェとお食事のできるエリア、チケット売場、Histopad®（イストパッド）貸出し所、売店（レベル0の階）にもアクセスが可能です。

居住棟ではペットの犬は抱えてご見学ください。 庭園では犬にリードを着けてください。 王城の地下部には犬を連れて入ることはできません。

安全設備

監視ビデオ ドローンの持込と飛行は禁止されています。 バッグ内部の確認 ベビーカーの検査

持ち物にご注意ください。放置されている物体は、王城全体の退去、爆発物解除、王城への損害賠償金10 000€の請求を招きます。

大容量のバッグとスーツケースの持ち込み禁止 未成年の方は、付き添いの保護者が責任を持つものとします。 城壁の周辺で人を押ししたり、城壁をよじ登ったりしないでください。周辺の住民に危険ですので、城壁の外へ物を投げないでください。

禁煙 火災時にはサイレンが鳴り、退出を促すランプが点灯します。係員が見学者の救助をいたします。 庭園には勾配が10%を超える箇所があります（表紙の地図の順路を御覧ください）。

居住棟内では、バッグバックを手に持つか前に抱えてください。 フラッシュは使用しないでください。

快適な見学のために：

売店 wc 身体障害者の方もご利用になれるトイレ 居住等ではなるべく静かに行動願います

年間を通してお飲物と軽食をお求めになれます。カフェと軽食レストランが、4月1日から9月のヨーロッパ文化遺産の日まで開いています。 庭園の芝生の上での昼食は許可されています。

ウォーターサーバーがオランジュリー前に設置されています。 居住棟内での食事は禁止されています。 分別ゴミ

紋章の回廊

アンボワーズ王城の敷地内に入りましたら、衛兵が徒歩で出入りしていた入り口からご入場ください。ここは、かつて城の最初の跳ね橋と落とし格子の門で守られていました。この回廊は、11世紀から19世紀に渡る、城の歴代の所有者の紋章で飾られています。



傾斜路の下から上へ、左側：



フルク・ネラ、アンジュー伯
(970年～1040年)



フィリップ=オーギュスト (1165年～1223年) フランス王



アンボワーズの諸領主と、ルイ・ダンボワーズ
(1392年～1469年)



シャルル7世 (1403年～1461年)
ルイ11世 (1423年～1483年)
ルイ12世 (1462年～1515年)
フランソワ1世 (1494年～1547年)
アンリ2世 (1519年～1559年)
フランソワ2世 (1544年～1560年)
シャルル9世 (1550年～1574年)
アンリ3世 (1551年～1589年)



ガストン・ドルレアン
(1608年～1660年、ルイ13世の弟)



シヨワズール公 (1719年～1785年)



パンティエール公
(1725年～1793年)



ピエール=ロジェ・デュコ
(1747年～1816年)



ルイ=フィリップ1世
(1773年～1850年)
と、1883年までのその子孫



ブルボン家の宗家が断絶した1883年以降の、ルイ=フィリップのブルボン=オルレアンの家系の子孫。

傾斜路の下から上へ、右側：



シャルル8世
(1470年～1498年)
フランスとエルサレムの王



アンリ4世 (1553年～1610年)
ルイ13世 (1601年～1643年)
ルイ14世 (1638年～1715年)
ルイ15世 (1710年～1774年)
フランスとナヴァアラの王



オランジュリー：カフェとマルチメディアスペース



王城のテラスに到着する前に、レストランスペースが開設されたばかりのオランジュリーにて、見学者は中世からこんにちに至るまでの王城の全ての姿を発見できます。3Dモデルはルシー・ゴーガンの博士論文と、近年フランス国立中央文書館によって修復された、アンボワーズ城の1495年及び1496年の建設勘定書によって作成されました。見学者が操作できる画面と大スクリーンを見ることで、この建造物の規模を知ることができます。王城の重要な建設工事の最初の段階は、アンボワーズで1470年に生まれたシャルル8世の治世下にて行われました。それにより、19世紀に言い伝えられていたのと異なり、シャルル8世の治世下に建設された箇所が75%がこんにちまで残っていることがわかります。彼が1491年から1498年(王が28歳で亡くなった年)にかけて命じた工事が極めて早かったことが、ビデオで大スクリーンに映し出されています。また、建材のトゥファ石の採掘所、水路・陸路の輸送経路、そしてパリの凱旋門を超える建材の量についても見るすることができます。



シャルル8世の工事のビデオ、「残存する王城の75%」

オランジュリー：諸サービスがご利用になれるスペース



年間を通じて、お飲物や軽食の自動販売機がご利用になれます。カフェと軽食レストランが、4月1日から9月のヨーロッパ文化遺産の日まで開いています。

アンボワーズ王城のテラスにて

現在位置



王城のテラスから、ロワール渓谷、15世紀と16世紀の建造物、傾斜のゆるやかな庭園、そして巨大な2基の騎兵の塔などの素晴らしい眺めを楽しむことができます。

ルネッサンス期に、王族は住居として、権力の象徴として、そしてまた政治・経済・芸術活動が集中する場としてこの城を利用しました。フランドルやイタリアから様々な建築様式が導入された重要な時代の記憶を、この王城はとどめています。イタリアは、16世紀前半にわたりフランス国王の征服欲をかきたてたのみならず、その芸術性の高さが賛称されました。王族はアンボワーズに多くのイタリアの芸術家や知識人を招き、そのことが数十年間フランスのゴシック様式に影響を与え、独特の「初期フランスルネッサンス様式」を生み出したのです。ルネッサンス期に王族の権力の中心地であったアンボワーズ王城。ここは、ヴァロワ家とブルボン家の全ての王の邸宅あるいは滞在地でした。また、王子や王女の誕生、洗礼、結婚のみならず、陰謀や平和勅令のような、王国の様々な出来事の舞台となりました。城は王族を危険から守っていた、険しい要塞に囲まれています。王と王妃と一緒に暮らしていない時期には、後に国王となる人物の幼少時代の庭園でもありました。例えばシャルル8世はここで生まれ、フランソワ1世とその姉マルグリット・ダングーレーム、アンリ2世とカトリーヌ・ド・メディシスの子供たちがここで幼少時代を過ごしました。



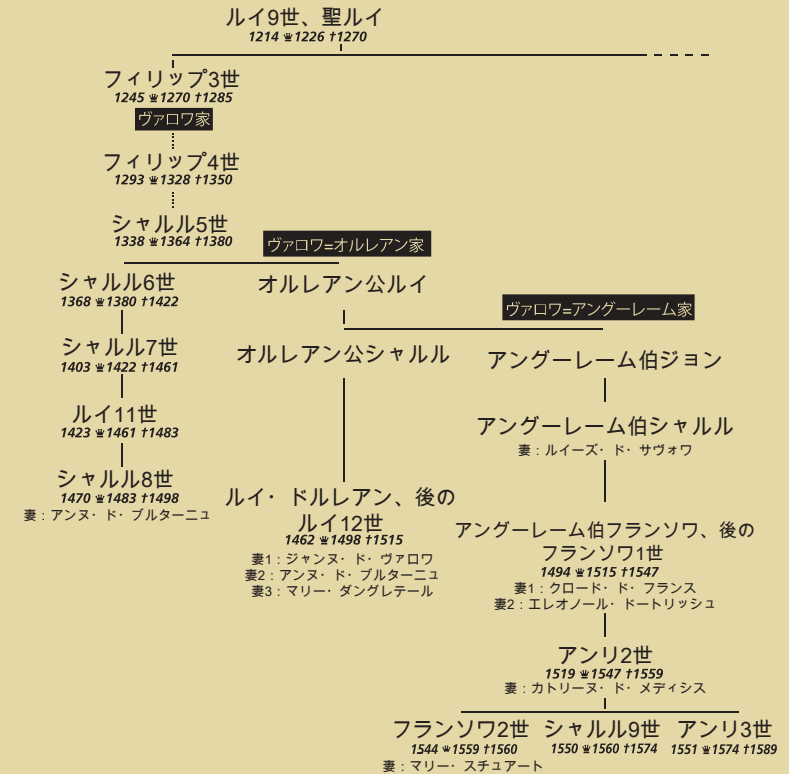
カトリーヌ・ド・メディシスの城南部の3D鳥瞰図

歴史の幕開けからルネッサンス期にかけて

アンボワーズは新石器時代から人間の住みかとなり、ケルト人の一部族であった、トゥロネス族が暮らす主要の町となりました。最初の要塞は、岩壁の突出部に建設され、ガロ・ローマ人による手工業の発達を促します。紀元後第4世紀には、町の上に建設されていた居住棟を守るための堀が造られました。503年に、フランク王国の王クロビスは、西ゴート族の王アラルリックと、要塞の北側の対岸に位置する中州、イルドー (île d'Or) にて対戦しました。中世においてこの要塞は、対立していたアンジュー公とブルボン伯が、激しい攻防を繰り返す舞台でした。1214年にフランス王フィリップ=オーギュストはトゥーレーヌ地方に入り、アンボワーズの領地をその支配

下に置きました。しかし1431年に、ルイ・ダンボワーズは王シャルル7世 (1403年/在位1429年~1461年) の寵臣ラ・トレムイユに対する陰謀を企んだ罪で、死刑の判決を受けてしまいます。彼には恩赦が与えられましたが、アンボワーズ城は没収され、王領となりました。その後シャルル7世は、アンボワーズにて自由射手隊を創設。彼の後継者ルイ11世 (1423年/在位1461年~1483年) は、主塔の近くに妻のシャルロット・ド・サヴォワが眠る礼拝堂を建設させました。アンボワーズはまた、ルイ11世の息子、後にシャルル8世となるシャルル王太子 (1470年/在位1483年~1498年) の出生地でもあります。

ヴァロワ家の系図



シャルル8世の肖像画 アンヌ・ド・ブルターニュ

シャルル8世治世初期の、フランス王国

不安定な政治情勢

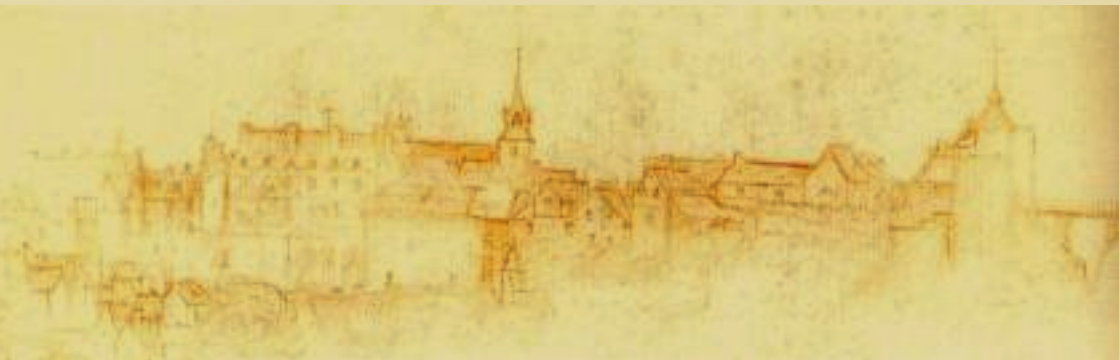
シャルル王太子は父ルイ11世が亡くなった時、まだ未成年だったため、姉のアンヌ・ド・ボージューが摂政となりました。それに対し、シャルル王太子の従兄弟、オルレアン公は、ブルターニュ公 (1484年) やマクシミリアン・ドートリッシュ (1486年) と手を結んで、彼の権力の座を狙いました。こうして、フランス王に対する反乱、「狂った戦争」が、1486年から1488年にかけて勃発します。

アンヌ・ド・ブルターニュとの結婚

アンヌ・ド・ブルターニュは、ブルターニュ公フランソワ2世 (モンフォール家) から公位を継承しました。この当時、敵対関係にあったハプスブルグ家の帝国とヴァロワ家のフランス王は、ブルターニュ公国の所有権を奪い合っていました。1488年にフランソワ2世が亡くなると、フランス王に対する反逆であった「狂った戦争」に終止符が打たれました。一方ハプスブルグ家のマクシミリアンは、公位を引き継いだアンヌ・ド・ブルターニュと婚約を結んでいました。しかしフランス王シャルル8世はそれを無効にし、同時に、マクシミリアンの娘マルグリット・ドートリッシュとの婚約を破棄しました。そして1491年12月6日にアンヌと結婚しました。この二人の婚姻により、ブルターニュ公国はフランスに結びつき、1532年に併合が完了します。アンヌはシャルル8世とアンボワーズで暮らしました。若い王妃は3人の王子と1人の王女を産みましたが、4人も夭折してしまいます。その死別の悲しみにくれないながらも、彼女は宮廷にてその意思を実現させました。女性の地位を向上させるため、身分や婦徳の高い女性を100人ほど彼女の周りに結集させたのです。また、自身の著名な時祷書の装飾画を描いたトゥールの画家、ジョン・ブルデシヨンや、彫刻家ミシェル・コロンプのような才能のある画家たちを身边に集めました。

テラスにて

アンボワーズに滞在した王の大建設プロジェクト



レオナルド・ダ・ヴィンチが1517年に描いた、王城の要塞南側の風景画(王城のコレクションに含まれません)

シャルル8世は、アンヌ・ド・ブルターニュと1491年に結婚した直後、幼年時代を過ごしたアンボワーズ城に移り住むことを決めました。その翌年、彼は中世の居住棟の拡張と、サン・テュベール礼拝堂の建設を開始し、1493年に竣工。その後も南側の七要徳の館や、北側の王族の居住棟のプロジェクトに次々と着工しました。王がイタリアに発つ前に発注した建築物は、ゴシック建築のフランポアイヤン様式によるものです。王は1496年に、多くのイタリア人芸術家を連れてフランスに戻りました。そして芸術家たちに、居住棟の内部の装飾を任せ、イタリア式邸宅の庭から着想を得た庭園を造らせました。今日においても、王の最も革新的な建設プロジェクトは、巨大な2基の騎兵の塔であると言えるでしょう。



1498年当時のシャルル8世の王城、南東-北西方向の3D鳥瞰図

1498年にシャルル8世が亡くなった時には、王城の工事は全て終わっていませんでしたが、5年も経たずにプロジェクトの殆どが竣工を迎えるに至ったのです。

フランス王によるイタリア遠征と、アンボワーズへの最初のイタリア人の到着

シャルル8世は、ナポリ王フェルランテ1世の死去に際し、ナポリの王位継承権を要求しました。その要求の根拠は何だったのでしょうか。プロヴァンス最後の伯爵であり、1442年にアラゴン人が占領する前のナポリ王国の、「正統な」君主でもあったシャルル・ドゥ・メーヌの継承者が、シャルル8世だということだったので。

こうしてシャルル8世は1494年に、3万人の兵士を引き連れ、王国の遠征に発ちました。フランス軍は1495年2月にナポリに到着します。その後も、シャルル8世、ルイ12世、フランソワ1世はイタリア遠征を続け、ナポリ王国やミラノ公国に侵攻しました。王たちは数々の勝利を果たし(最も有名なのは1515年のマリニャーノでの勝利)、何度もイタリアを占領していた期間もありましたが、最終的にこれらの遠征は、歴代の王に不利な結果をもたらすこととなりました。アンリ2世は1559年にカトー・カンブレジ条約に調印し、フランス軍のイタリア半島進攻の終結を宣言しました。ただしイタリアに遠征をしたことにより、フランス王たちはイタリアルネッサンスの芸術に触れ、その感性に刺激を受けたのです。彼らはこの国から、画家のアンドレア・デル・サルトルや、かの有名な芸術家でありエンジニアであった、レオナルド・ダ・ヴィンチに代表される何人かの文芸家や芸術家をフランスに招きました



シャルル8世が盛大にナポリに入城する様子(王城のコレクションに含まれません)

01. サン・テュベール礼拝堂

狩人の守護聖人であるサン・テュベールを奉るこの建築物は、ルイ11世時代に着工された礼拝堂の基礎の上に、1493年に建設されました。王族の人々が私的に利用する目的で建設されたこの礼拝堂には、ゴシック建築のフランポアイヤン様式が用いられています。またこの礼拝堂は、1519年5月2日にアンボワーズで死去した、レオナルド・ダ・ヴィンチの墓が据えられていることで特に有名です。

- コーニス(内部最上部の水平帯)の装飾は、フランドルの職人がトゥワア石(石灰岩)を彫刻した作品であり、絡み合う植物と動物(カエル、蛇、猿...)を表しています。
- ステンドグラスは、マックス・アングランのアトリエにて1952年に作成され、ルイ9世(聖ルイ)の生涯を表しています。



狩人の守護聖人である、サン・テュベールを献じて、鹿の角をかたどった装飾が19世紀に施されました。



外側から見た、礼拝堂入口の上部には、修行に励むアレキサンドリアの聖アントニウス、童子姿のキリストを背負う聖クリストフォロス、15世紀末の作品聖フェルトウス(サン・テュベール)の改心が表されています。その上には、シャルル8世とアンヌ・ド・ブルターニュの姿が見られます。



礼拝堂の身廊のヴォールトを低い視点から撮影

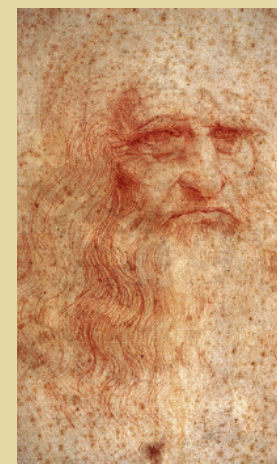
レオナルド・ダ・ヴィンチ(1452年-1519年)の墓

フランソワ1世が王城にダ・ヴィンチの遺骸を1519年に葬る特例を認めたことで、このイタリアの巨匠の名は王城に永遠に残っています。

彼は、フィレンツェ、ミラノ、マントヴァ、ヴェニス、ローマとポローニャで長い間輝かしい経歴を築いた後、1516年に64歳でアンボワーズに到着しました。フランソワ1世とダ・ヴィンチが出会ったのは、ポローニャでのことです。フランス王は、現在クロ・リュセと呼ばれるクルーの館を彼に与え、「王の最高の画家、エンジニア、建築家」に指名し700エキユの年金を与えました。ダ・ヴィンチは特に水路、工事都市計画、建築における教育や、デッサンのために残された時間を捧げました。ロモランタンの町の都市計画と、シャンボール城の一部の設計を、ダ・ヴィンチが担当したという説も有ります。王と親しかった彼は、1518年、王のために饗宴の数々の余興を考案しました。



レオナルド・ダ・ヴィンチの墓



レオナルド・ダ・ヴィンチの自画像(王城のコレクションに含まれません)

02. 王族の居住棟向かい、側庭と堀

ロワール川に平行する王族の居住棟に向かいますと、入口の左に堀が見えます。



主塔の堀、ジャック=アンドルー=エ・デュー・セルソールの銅版画(部分)

当時のポーム球戯の様子(王城のコレクションに含まれません)

王城の堀での悲劇的な球戯

有名な年代記作者、フィリップ・ド・コミーヌがこの事件について記述を残しています。1498年4月7日、シャルル8世は王妃アンヌ・ド・ブルターニュと、ポーム球戯(その当時のテニス)を観るため、アクルバックの回廊に向かいました。この回廊は、7要徳の館の南北から王の居住棟にかけての堀の上に位置し、その堀で球戯が行われたのでした。この堀は17世紀に埋められ、19世紀にその一部が再度掘られました。シャルル8世はその時に回廊の扉のかまちに頭をぶつけてしまいます。彼は数時間後に、男性の跡継ぎを残すことなく、28歳で亡くなりました。

ロワール渓谷で最初のルネッサンス建築様式が現れた、アンボワーズ



王族の居住棟



左から右へ:ゴシック様式の屋根窓(シャルル8世の棟)とルネッサンス様式の屋根窓(ルネッサンス様式、フランソワ1世の棟)

シャルル8世の死後すぐ、後継者ルイ12世(1462年/在位1498年~1515年)の治世下、要塞の南側とドン・パッチェ口の庭園に沿った回廊に接した、二番目の騎兵の塔、ウールトー塔が完成しました。アンボワーズの町には税制上の特権が与えられていましたが、ルイ12世の死後、新しく王となったフランソワ1世(1494年/在位1515年~1547年)は「アンボワーズで幼少時代を過ごした思い出」のためそれを更新し、ロワール川に直角に交わる王

城の翼棟を建て増しました。その翼棟の屋根窓にはイタリア調の柱形装飾が付けられ、ロワール川に平行に建てられたシャルル8世の棟に見られる、ゴシック・フランポアイヤン様式の小尖塔(ピナクル)を持つ屋根窓と対照的です。アンリ2世は後に、居住棟のルネッサンス様式の翼棟に平行して、その東側に別の居住棟を建設させました。一時期は部屋の数が220にまで達した、壮大な建築物の規模が想像できることでしょう。

ゴシック建築の居住棟

03. 王族の居住棟の入口、衛兵の間

この階には、王侯貴族が暮らす上の階を守るため、衛兵が控える間が複数配されています。王の衛兵隊は、スコットランド衛兵とスイス衛兵で構成され、後にフランスのマスケット銃兵が加わりました。

- ・尖塔アーチが交差する丸天井。
- ・武具: 剣、丸盾、矛槍、甲冑、16世紀のスタイルの武具一式。
- ・建築物の模型: 手で触れることのできる現在の姿の王城と、ジャック=アンドルー=エ・デュー・セルソーによる16世紀の王城の立体図



04. 衛兵の巡回路

この開かれた回廊から、ロワール川での航行や渡河の様子を監視することができました。



全ての見学者向け



見学順路は左側に続きます。

この回廊の右にある柵の近くにベビーカーを置いておくことができます。見学終了後にベビーカーを取りにお戻りください。

05. 支柱の間

この間は、使用人や衛兵が、堀を見下ろす主塔の古い回廊と王の居住棟の間の行き来に利用していました。ここで見られる階段が、シャルル8世の盛装用の部屋（こんにち「鼓手の間」と呼ばれています）へと続いていました。



- 向かって左から右：
- 王城の風景画：ジャック＝アンドルー・エ・デュー・セルソー「フランスの最も優れた建築物」より抜粋（1576年）。現存する建物は黒色で表されています。
 - 尖塔アーチが交差する九天井。
 - 部屋全体を支える中央の柱は、「ゴシック様式のヤシの木」とも呼ばれていました。
 - 16世紀の鎧兜の複製（19世紀）。



見学順路は、この間の奥から、階段を上って続きます。



居住棟の入口までお戻りください。居住棟の後ろ、庭園側から二階に上がります（表紙の地図をご覧ください）。オーマル公の回廊の下から、スロープを利用して二階に上がることができます。

06. 鼓手の間

この間に、かつて王シャルル8世の「盛装用の部屋」がありました。当時は宮廷が移動することが多く、それに従って家具も運んでいました。この鼓手（演奏家）の間には、この城で催された数々の供宴や舞踏会の面影が残されています。この間の呼び名は、ルイ14世がアンボワーズに滞在したエピソード（1661年）にちなんで付けられました。



- 向かって左から右：
- 15世紀の様式の影響が見られる、花の模様が入ったテラコッタのタイル張りの床。
 - 1491年にシャルル8世とアンヌ・ド・ブルターニュの結婚の交渉を行った、枢機卿ジョルジュ・ダンボワーズ（1460年-1510年）のカテドラ（司教座）。ジョルジュ・ダンボワーズは次の国王が戴冠した後、1498年に首相に任命されました。
 - この間の持ち出し部分に据えられている、14世紀初期の、聖ルイ（ルイ9世）の像。
 - 「ダリウス一族からアレキサンダー大王へのオマーージュ」が織られた16世紀末のフランドル製のタペストリー。
 - シャルル8世治世時代の櫃。
 - シャルル8世の時祷書（祈祷文や宗教儀式の選集）。マドリッドの国立図書館に保存されている1484年の原本より。
 - 中庭側の木製の扉は、現存していない外側の回廊に向かって開いていました。その回廊から、続きの部屋や外側の螺旋階段へと移動することができました。
 - シャルル8世と王妃アンヌ・ド・ブルターニュの肖像画
 - ゴシック様式の飾り戸棚
 - マクシミリアン・ド・トリッシュュの肖像画



16世紀後期のフランドルのタペストリー、ダレイオス王一家によるアレクサンドロス大王へのオマーージュ。

ブルターニュのフランス王国への併合（1532年）

フランス国王シャルル8世と、ブルターニュ公爵フランソワ2世の唯一の子孫アンヌ・ド・ブルターニュの1491年の結婚により、ブルターニュはフランス王国と人的に結びついた最初の時代を迎えました。シャルル8世が死去した時点において（1498年）、二人には存命の子孫がいなかったため、アンヌ・ド・ブルターニュ（1477年～1514年）は婚姻契約に従って、シャルル8世の従兄弟であるフランスの新国王ルイ12世（1462年/在位1498年～1515年）と再婚しました。

ルイ12世の後継者であるフランソワ1世（1494年/在位1515年～1547年）は、ルイ12世とアンヌ・ド・ブルターニュの娘クロード・ド・フランス（1524年没）を妻とし、続いて息子のフランソワとアンリが継承権を持つ、ブルターニュ公国の用益権者となります。1532年、「公爵兼王太子」であるフランソワが成年に達した年に、公国政府はフランス王国との統合を受け入れました。

07. 大広間

ルネッサンス期において、フランス国王は地方総督や官吏、地位の高い聖職者の忠誠を支えにしつつ王国の領土に権力を広げてゆきました。国王はまた、勢力のある諸領主に、国王の住居の近くに妻を伴って数ヶ月滞在をすることと要求しました。こうして貴婦人が宮廷に入場することとなりました。壮麗な接見や祝宴が、宮廷での生活に欠かせない娯楽となってゆきます。この間は、他の同様の大広間に先立って、そのような行事を催す場として利用されました。1518年に王太子の洗礼、そしてローマ教皇の甥ロレンツォ2世・デ・メディチとマドレーヌ・ド・ラ・トゥール・ドヴエールニユの結婚のための、宮廷の饗宴が開かれた中庭に面しています。この結婚は、マリニャーノで勝利したフランソワ1世が、教皇庁と欧州、特にイタリアの主な君主国政府に近づききっかけとなりました。



マリニャーノでの勝利
(王城のコレクションに含まれません)

向かって左から右:

- 入り口左の暖炉は、悪天候の季節にも快適な温度を保ちます。この暖炉は台形の煙道を備え、ゴシック様式に従って造られています。煙道の装飾にみられるフランボワイヤン様式(あるいは掌形)の剣は、シャルル8世の紋章です。
- 中央の柱: フランス王国とブルターニュ公国のそれぞれの紋章である、ユリの花と白イタチの装飾が施されています。
- ロワール川側に配された王座には、花の模様が入った天蓋がかかっています。
- ジョン・クルーエ1515年作の、フランソワ1世の肖像画
- 天井には、シャルル8世(Cの組み合わせ模様)とアンヌ・ド・ブルターニュ(Aの文字)のモノグラムが見られます。
- この間の片隅にある二基目の暖炉は、典型的なルネッサンス様式を表しています。
- 出口左側奥のパネルには、フランソワ1世の紋章であるサラマンダーが見られます。
- 中庭側の木製の扉は、現存していない外側の回廊に向かって開いていました。その回廊から、続きの部屋や外側の螺旋階段へと移動することができました。
- 高い背もたれ付きの椅子は、ゴシック様式のナプキンのひだ模様で装飾されています。
- コンソールテーブル上のフランソワ一世の胸像(端の柱間、右側の壁面)

フランソワ1世(1494年/在位1515年~1547年) フランスルネッサンス芸術の偉大なる庇護者

ルイ12世は、従兄弟であり、彼の継承者とされていたフランソワ・ダンゲーレームを迎えるにあたり、アンボワーズを選びました。母ルイーゼ・ド・サヴォワと姉マルグリットに付き添われ、当時4歳であったフランソワは、アンボワーズに移り住みました。彼は1515年に戴冠するまで、この城で幼年時代を過ごしました。彼はルネッサンスに魅了され、芸術を庇護した偉大な王とされています。彼は特にビュデ、マロ、デュー・ベレー、ロンサール、ラプレーといったフランスの知識人の庇護者となり、アンドレア・デル・サルト、レオナルド・ダ・ヴィンチ、ベンヴェヌット・セリーニなどのイタリアの芸術家を身边に集めました。また、ルイ12世が建設させた王城のルネッサンス様式翼棟を更に高くし、屋根窓をイタリア様式に従って装飾させました。

後にフランソワ1世となる、若き日のフランソワ・ダンゲーレームの肖像画



檄文事件..... アンボワーズの陰謀、宗教戦争の発端

フランソワ1世は、1516年にポローニャで教皇庁と協定を結ぶことで、教会に対する権威を示しました。彼はプロテスタントに寛容的でしたが、その当時神学者の間で盛んだった論争に距離を置いていました。しかし、1534年の10月17日と18日の夜の間に、「教皇のミサの、恐るべき、重大な、耐えがたき弊害」を批判する内容の檄文が、王国の主要都市、そしてアンボワーズ城の王の寝室の扉にまで張られました。この挑発により、国王が一時期考えていた穏健なプロテスタント教の導入が突然中断されました。そして200人から300人の容疑者が逮捕され、異端とみなされた容疑者数十人が磔刑に処されるに至ったのです。

1560年のこと、アンリ2世とカトリーヌ・ド・メディシスの長男である新国王フランソワ2世は16歳でした。彼はその前年にスコットランド女王メアリー・スチュアートと結婚していました。当時の実権は王妃メアリーの伯父ギーズ家が握っており、ギーズ家は新教徒(プロテスタント)の弾圧の支持者でした。ギーズ家の影響を排除をするため、新教徒たちは、1560年3月27日と29日に、アンボワーズ城でフランソワ2世を誘拐しようと企てます。しかし陰謀を企てた彼らは捕らえられ、裁判にかけられ、広場で処刑されました。その中の何人かは、「みせしめとして」城のバルコニーに吊るされました。この王国の主要人物の間に起こった対立は、1572年8月24日夜のサン=バルテルミーの虐殺において頂点に達します。



アンボワーズの陰謀(1560年)の銅版画

フランス王妃、メアリー・スチュアート(1542年-1587年)の肖像画(王城のコレクションに含まれません)



国王フランソワ2世(1544年/在位1559年~1560年)の肖像画(王城のコレクションに含まれません)



ルネッサンス様式の居室

08. 大居室

もともとこの場合は、国王が近親の人々を迎えるために荘重に整えた部屋でした。現在ここは、家具や王の食事の習慣に関する品々の展示場となっています。中世の脚台に代わって「イタリア風の」テーブルが用いられるようになりました。このテーブルにはふんだんに装飾が施され、継ぎ足板を備えています。当時は食卓の作法の発達が遅く、歯が二本しかないフォークが使われていました（アンリ3世の時代までは、大抵の人々はナイフとスプーンを使っていました）。

エステル王妃の祝宴、オービュソン王立
タペストリー製作所、17世紀の作品



- 向かって左から右：
- ・ゴシック様式の家具：（クレダンス、あるいはビュッフエと呼ばれる）飾り戸棚、椅子二脚。
 - ・ルネッサンス様式の家具：イタリア調のテーブル、胡桃材の櫃、背もたれの長い椅子、保存箱が付いているベンチ。
 - ・ジローラモ・デッラ・ロツピア（1488年～1566年）による、フランソワ1世の胸像
 - ・ルネッサンス調の装飾が施された、ジャンとプロワの陶器、19世紀の作品
 - ・ルネッサンス調の大皿
 - ・ル・ブランの下絵にもとづいて、17世紀にフランスのオービュソン製作所に織られたタペストリー。

ルネッサンス期における遠近法の導入

家具調度品に関し、15世紀末のゴシック様式は、ナプキンのひだ飾りや尖塔アーチのモチーフを特徴としていました。ルネッサンス期になると、トロンプレイユと呼ばれる古代の遠近法が再認識されるようになりました。この手法には、家具とタペストリーの装飾に深い奥行きを与える効果があります。



ナプキンのひだ飾り ルネッサンス様式の装飾

09. 国王の寝室

この部屋はフランソワ1世(1494年/在位1515年～1547年)とその息子アンリ2世(1519年/在位1547年～1559年)の寝室でした。また、アンリ2世の妻カトリーヌ・ド・メデイシス(1519年～1589年)にもこの寝室は利用されてきました。彼女は夫の悲劇的な死の後、息子たちの治世下において積極的に政務に携わりました。この寝室の装飾は、16世紀の装飾芸術に遠近法が取り入れられたことを良く示しています。



アンリ2世の肖像画（フランソワ・クルーエによる）とカトリーヌ・ド・メデイシスの肖像画

- 向かって左から右：
- ・ルネッサンス初期の保存箱が付いている椅子
 - ・フランス王アンリ2世の肖像画
 - ・精巧な装飾が施された、アンリ2世様式の大ベッド(2.18 m x 1.82 m)
 - ・二重底になっている宝石箱
 - ・フランス王妃、カトリーヌ・ド・メデイシスの肖像画
 - ・プリュセルとトゥルネーの雇用カーテン及びタペストリー（16世紀末と17世紀）。



- 向かって左から右：
- ・ルネッサンス様式の大形説教壇
 - ・アンリ・ド・ヴォレアルによる、カラーレ大理石に刻まれたダ・ヴィンチの胸像（1865年の作）
 - ・カクトワールと呼ばれている、談話用肘掛け椅子
 - ・フランソワ=ギヨーム・メナジヨ作の絵画「レオナルド・ダ・ヴィンチの死」（1781年にルイ16世が購入）、アンボワーズ市委託
 - ・アンリ2世様式のテーブル
 - ・ラファエロによる「フランソワ一世の聖家族」の19世紀のレプリカ。オリジナルは、ローマ教皇が1518年にフランス国王夫妻に、王太子の洗礼を記念し贈呈したものです。

芸術を奨励した者、レオナルド・ダ・ヴィンチ

レオナルド・ダ・ヴィンチの知見の広さ、学識の高さ、そして才能はフランスの宮廷の賞賛的でした。彼の影響力は、「芸術と文学の庇護者」であったフランソワ1世の名誉をさらに高めます。こうして1519年6月、フランス国王はこの巨匠の肖像画の数々を購入しました。国王の礼拝堂に飾られた「聖母子と聖アンナ」は、その中でも有名な作品です。レオナルド・ダ・ヴィンチの亡き後も、18世紀と19世紀にその功績はより広く認められました。画家フランソワ=ギヨーム・メナジヨ（1744年～1816年）の1781年の作品「レオナルド・ダ・ヴィンチの死」には、フランソワ1世が、このトスカナ地方出身の巨匠の息を引き取る瞬間を見守る様子が描かれています。ダ・ヴィンチは、王が彼に与えた王城近くのクローリュセの館で亡くなったとされています。実際は、この日国王はサンジェルマン・アン・レーに赴いていたためダ・ヴィンチの死に立ち会っていません。ただし、この作品は芸術の庇護者であった王と、フィレンチェの巨匠の親交の深さを感動的に表しているといえるでしょう。同年、国王ルイ16世はこの絵を購入し、ヴェルサイユの回廊を飾る予定のタペストリー製作のモチーフとして使わせました。この作品と同じ場面が、ジャン=オーギュスト=ドミニク・アングル（1780年～1867年）の優れた筆による「レオナルド・ダ・ヴィンチの死」（1818年の作）に用いられています。画家メナジヨは、これにより19世紀の間に流行したトルバドゥール様式の先駆者の一人とされています。この場面にインスピレーションを得た数々の銅版画が、多くのブルジョワ階級の邸宅に飾られ、ルネッサンス期の2人の傑出した人物とされる、国王と芸術家の名声を高めました。



フランソワ=ギヨーム・メナジヨの1781年の絵画「レオナルド・ダ・ヴィンチの死」、アンボワーズ市委託

10. 衣装部屋

19世紀に改装された、寝室に隣接するこの部屋には、王と王妃の衣装が保管されていました。



- 向かって左から右：
- ・悪魔を倒す、サン=ミシエルの像。17世紀のスペイン
 - ・マントルピース（19世紀）：フランシスコ修道会の象徴である、帯織を組合わせた装飾。そして、サン=ミシエル騎士団の首飾り。
 - ・フランス国王、アンリ4世（1553年/在位1589年～1610年）の肖像画

悪魔を倒す、サン=ミシエルの像。

サン=ミシエル騎士団の結成

国王ルイ11世（1423年/在位1461年～□1483年）は、フランス初めての騎士団である、サン=ミシエル騎士団を1469年に結成しました。その結成の儀式は、アンボワーズ城の聖フロランタン参寺院にて行われました。この寺院は現存しません。王族の権力を示す催事（各滞在地への盛大な入場や、宗教的の儀式など）に仕えていたのが、この騎士団の騎士たちです。



王城の混沌とした運命

アンリ3世（1551年/在位1574年～1589年）以降、君主のアンボワーズ滞在はまれになりました。アンリ4世の時代に、宮廷はロワール渓谷を永久に去り、イル・ド・フランス地方へ移りました。

アンボワーズに17世紀から18世紀にかけて滞在した君主たち

- 向かって左から右（全肖像画は、王城のコレクションに含まれません）：
 フランドル人の画家、フランツ・プーブルス5世によるアンリ4世の肖像画
 フィリップ・ド・シャンパーニュによる、ルイ13世の肖像画
 ルブランによる若き日のルイ14世の肖像画
 ジョン・ランによるスペイン王フェリペ5世の肖像画



王城が放置されるようになると、かつての栄光の名残は衰退してゆきました。王城の牢獄や塔は王国に反逆する敵に対抗する目的に利用され続けました。その例として、1661年のニコラ・フーケや、17世紀と18世紀の捕虜が挙げられます。王城の要塞がルイ13世に対する反乱に利用されるのを防ぐため、大臣リシュリューは1631年に要塞の取り壊しと堀の埋立てを命じました。

アンボワーズ城は、そういった状況下であっても、17世紀の歴代の国王の滞在に利用されました。アンリ4世（1553年/在位1589年～1610年）は、1598年から1602年にかけて滞在、ルイ13世（1601年/在位1610年～□1643年）はより頻繁に訪れ、ルイ14世（1638年/在位1643年～□1715年）は、1650年から1660年にかけて滞在しました。



この階段はご利用になれません。Histopad©（イストパッド）を使って、大広間にいながら3階部のバーチャル見学をすることができます（お持ちで無い場合は、各部屋の係員にお申し付けください）。オーマル公の回廊に向かうスロープへ、係員がご案内いたします（見学順序№15、健常者の見学順序の最終段階に合流します）。

オルレアン公の居室

1763年に、ショワズール公（1719年-1785年）は国王ルイ15世からアンボワーズ城を譲り受け、公爵貴族の所領としました。しかし彼は後に城を放置し、その近くに建てられたシャントルー城（現存していません）に移り住みました。彼の死後、ルイ16世の従兄弟であり、ルイ14世の準正された孫と認められたパンティエール公（1725年～1793年）に1786年に買い取られます。彼は1789年に、王族の居住棟の内装工事と、新しいイギリス式庭園の工事を着工させました。庭園の曲がりくねった小道は現在も残されています。西側の「

ギャルソネ」と呼ばれる塔の上には、18世紀に流行した、中国趣味の八角形の塔が建てられました。城はフランス革命時に没収され、火事に遭いました。また帝政時代の執政であったピエール=ロジェ・デユコは、数回にわたって計画的な解体を行いました。ルイ=フィリップ・ジョゼフ オルレアン公爵（「エガリテ」とも呼ばれていました。1747年～1793年）の未亡人の、ルイズ=マリー=アデライード・ド・ブルボン（1753年～1821年）がこの城を相続しました。王政復古時代、彼女はパンティエール家の唯一の継承者でした。

ジャック・リゴーによる、アンボワーズ城の風景画、1740年頃



11. オルレアン=パンティエール家の書斎



この書斎には、後にフランス国民の王となる、ルイ=フィリップ1世の母方の祖父と両親の、18世紀末の肖像画の数々が展示されています。

向かって左から右：

- ・書斎の奥左側に、王国海軍大将姿の、ルイ=ジョン・マリー・ド・ブルボン、パンチエール公（1725年～1793年）の肖像画。彼はトゥールーズの伯爵の息子であり、国王ルイ14世の孫にあたります。
- ・帝政時代の様式のタンス、中国の花瓶
- ・19世紀の書斎

- ・ルイ=フィリップ1世の父であり、「フィリップ・エガリテ」と呼ばれていた、ルイ=フィリップ・ジョゼフ・ドルレアン（1747年～1793年）の肖像画
- ・ルイ=ジョン・マリー・ド・ブルボン、パンチエール公（1725年～1793年）の胸像（マントルピースの上）
- ・暖炉の右側には、アデライード・ド・ブルボン=パンティエール、オルレアン公爵夫人（1753年～1821年）の肖像画。彼女は、ルイ=フィリップ・ジョゼフ・ドルレアン（1747年～1793年）の未亡人、そしてアンボワーズ城の相続人でもあります（1793年）。肖像画は、ルイズ・ヴィジエ・ルブラン（1755年～1842年）によるものです。
- ・第一帝政様式の肘掛け椅子
- ・暖炉の両側には、ブーラーールのサインが入った、18世紀の中国趣味の椅子が配されています。パンティエール公爵の命によって作られた、アンボワーズ城の家具調度品（1787年から1789年にかけての作品）。
- ・リゴーによる1740年のアンボワーズ城の銅版画、「フランスの王族の宮殿」から抜粋（庭園側）

19世紀の地球儀



12. オルレアン家の居室



向かって左から右：

- ルイ=フィリップ1世 (1773～1850) の公定肖像画
- マホガニー製の引出し付きタンス、ルイ=フィリップ様式の透かし彫りが施されたつなぎ板付きの椅子
- 「第一帝政」様式の家具：舟形ベッド「レカミエ」、書き物机（スクレテール）、4脚で支えられた円卓、マホガニーの化粧張りを施したタンス、婦人用のデスク。
- 揺りかご（王政復古様式）
- 王ルイ=フィリップ1世の胸像
- ルイ=フィリップ1世とマリー=アメリー・ド・ブルボン=シシルの息子、フェルディナン=フィリップ・ドルレアン（1810年～1842年）オルレアン公爵と、エレーヌ・ド・メクレンブルク=シュヴェリーン（1814年～1858年）オルレアン公爵夫人の肖像画（フランツ=グザヴィエ・ウィンターアルターの画）。
- オラース・ヴェルネの作品（1846年）「息子たちを連れるルイ=フィリップ」に、1837年6月10日にヴェルサイユを出る場面が描かれています。

フランス国民の王、ルイ=フィリップ

ルイ=フィリップは国王ルイ14世の弟、フィリップ・ドルレアンに始まるブルボン家の分家の長でした。ルイ=フィリップはヨーロッパ諸国、そして米国へ亡命する以前は、初期の革命思想を支持していました。1830年7月、三日間の反乱「栄光の三日間」の後、国王シャルル10世は退位を余儀なくされました。そしてルイ=フィリップがその先進的な思想と大衆の人気によって、王座に就くことになりました。



1821年に、ルイ=フィリップは母ルイーズ=マリー=アデライード・ド・ブルボン=パンティエールからアンボワーズ城を受け継ぎました。後にフランス国民の王（1773年/戴冠1830年/1850年）となる彼は、当時城の周辺にあった46の家屋を手に入れ、それらを取り壊すことによって、城壁をよみがえらせます。王の居住棟はその当時の流行に合わせて装飾されました。

こうして「7月王政」の名で知られる18年間（1830年～1848年）の治世が始まります。ルイ=フィリップは改正された憲章（新憲法）の宣誓を行い、フランス国民の王、ルイ=フィリップ1世として即位しました。その治世の初期には経済的繁栄に恵まれましたが、やがて深刻な経済・社会的危機に見舞われるようになります。ルイ=フィリップが選挙改革の実行を拒否したことから人々の不満が表面化し、「革命宴会運動」が起こるようになりました。パリでの革命宴会の禁止によって暴動が勃発し、1848年2月24日、国王は退位を余儀なくされます。ルイ=フィリップは英国に亡命し、1850年に死去しました。

13. 音楽サロン

ルイ=フィリップにより、城はオルレアン家の保養地として整えられ、ここにその当時を偲ぶ品々が集められています。国王はその長男フェルディナン=フィリップに、このサロンに続く展望サロンの建設を任せました。展望サロンはミニームの塔の上に位置しています。

オルレアン家の思い出の品々



向かって左から右：

- ルイ=フィリップの息子にあたるジョアンヴィル公が、セント=ヘレナ島で死亡したナポレオン1世の遺灰をフランスに帰還させるために発注した船舶、「ベルプール」の模型。
- クールによる、国王の妹アデライード夫人(1777年～1847年)の肖像画。
- ルイ=フィリップ1世とマリー=アメリー・ド・ブルボン=シシルの三男でジョアンヴィル王子であった、フランソワ・ドルレアン（1818年～1900年）の肖像画。
- ブラジル皇帝ペドロ1世（ポルトガル王ピエール4世）の娘、ジョアンビル王女であった、フランソワーズ・ド・ブラガンス（1824年～1898年）の肖像画。
- 王政復古様式のコンソールテーブル。
- リオの紫壇の化粧張りを施した、エラールのグランドピアノ（19世紀）。
- エラールのハープ（19世紀）
- ルイ=フィリップの妻、マリー=アメリー王妃（1782年～1866年）の肖像画。二人の息子、オーマル公とモンボンシエ公と一緒に描かれています。
- マリー=アメリー王妃（1782年～1866年）と王の妹アデライード（1777年～1847年）の胸像
- ルイ・フィリップ様式の長椅子
- 格子飾りの背もたれが付いた、マホガニー製の椅子。ジャコブ（家具製造者）の刻印入り。
- ギュスタフ・ノエルによる、庭園から見た城の居住棟の風景画（19世紀）。

アブド・アル=カーディル首長滞 在の思い出

ルイ=フィリップ1世の国外追放後、オルレアン家の財産は、共和国の臨時政権によって、係争物として差し押さえられました。国事犯であった、アブド・アル=カーディル(1808年~1883年)を幽閉する場所を探していた当時の軍事省が、城を管轄し利用するものとされました。アブド・アル=カーディルは、その従者と共に1848年11月から1852年10月までの期間、アンボワーズ城に滞りました。



暖炉の周辺、左から右：

- ・アンジュ・ティシエによる、アブド・アル=カーディル首長(1808年~1883年)の木炭画
- ・ギユスターヴ・ル・グレ(1820年~1884年)作の、アブド・アル=カーディル首長(1808年~1883年)が城に入場する場面を描いた絵(画架の上)。
- ・レオン・ボナによる、アンリ・ドルレアン将軍、オーマル公(1822年~1887年)の肖像画



アルジェリア の征服：国事 犯アブド・ア ル=カーディル

アルジェリア総督となった、ルイ=フィリップの五男オーマル公(1822年~1897年)は、アルジェリアの植民地化において、重要な役割を果たしました。彼はアルジェリアにおいて、アブド・アル=カーディル首長が率いる遊牧民の抵抗にあいましたが、1843年にスマラと呼ばれる野営地を征服しました。首長は1847年12月24日に降伏を受け入れ、トゥーロン、そしてポーに移送されます。その後、高貴な囚人として名を残した彼は、1848年11月に、家族、従者併せて約80人と共にアンボワーズ城に幽閉されました。アル=カー

ディルは、1852年10月16日に皇子兼大統領ルイ=ナポレオン・ボナパルト(1808年~1873年)の個人的決断によって釈放されるまで、アンボワーズ城で4年間過ごしました。彼はフランスを去るとトルコ、そしてシリアに向かいます。アブド・アル=カーディルは1883年5月26日にダマスカスで生涯を終えるまで、その人生のほぼ全てを瞑想と教育に尽くしました。アンボワーズ城のテラス上部の「東洋の庭園」には、この地で生涯を閉じたアル=カーディルの従者にささげられた墓碑が、1853年から据えられています。



オルレアン家の居室を出て、ミニームの塔の屋上部にアクセスします。

14. ミニームの塔

塔の屋上

ミニームの塔の屋上からは、40メートル眼下にロワール河が望めます。皇子兼大統領であったルイ=ナポレオン・ボナパルト(1808年~1873年)は、1843年に建設された展望サロン(現存しません)に1852年10月16日に迎えられ、アブド・アル=カーディル首長の釈放に署名しました。この塔の上部は、19世紀末に建築家ルブリッシュ=ロベールによって全て改築されました。

アンジュ・ティシエ(1814年~1876年)の1861年の作品、皇子兼大統領ルイ=ナポレオン・ボナパルトがアブド・アル=カーディル首長に釈放を告げる場面

ミニームの塔の屋根部



階段をご利用になりますと、シャルル8世の治世下に建設された、騎兵の塔の傾斜路まで下りることができます。



階段の下にて、見学前にベビーカーをお預けになった方は、柵の近くにてお引取りになることができます。



騎兵の塔の傾斜路

炎から脱出した皇帝

国王や帝王は引き馬や騎馬のまま簡単に町から城のテラスまで上ることが出来るよう、塔の傾斜通路は巧みに設計された螺旋を描いています。1539年12月にフランソワ1世に招かれていたカール5世皇帝は、もう片方の騎兵の塔、ウールトー塔から王城に入りました。皇帝の滞在中、隊列が塔を上っている最中に、たいまつが塔の垂れ布に燃え移るといふ事故が起こりました。皇帝はこの火事から無事に脱出し、その翌日フランドル地方に向けて旅立つことができました。

騎兵の塔の上部から、オーマル公の回廊に入ります。



15. オーマル公の回廊



この回廊には、ルイ=フィリップの五男であり、1895年から城の所有者であった、オーマル公(1822年~1897年)の名が付いています。軍人、政治家であった彼は、同時に芸術の名高い庇護者でした。彼のフランス最大の書籍と古美術品のコレクションは、現在フランス学士院の管轄において、シャンティイー城に集められ、保管されています。ルネッサンス期には、この回廊は右側の王族の居住棟と、アンリ2世の居室及び左側に平行している、現存しないアンリ2世の子供たちの部屋(庭園に面していました)をつないでいました。

ここは、健常者、身体が不自由な方々に共通の見学順路です。王族の居住棟の出口を出ると、ナボリの庭園(オーマル公の回廊の左)から始まる、庭園の見学順路が続きます。



王城の庭園



造園技術の歴史において、アンボワーズの空中庭園は15世紀最後の年に重要な発達を遂げました。ナポリ王国での束の間の勝利からの帰路、シャルル8世は、イタリアの庭園に感嘆された思い出を抱いていました。城に帰還した彼は、王城の大工事に造園される箇所を含めたのです。造園を任されたナポリ出身の聖職者ドン・パッチェロ・ダ・メルコリアーノは、新しい居住棟に隣接する庭園の実現に尽力しました。この庭園は、観賞用でありながら、五感が研ぎ澄まされ心の静けさが得られる場であるという発想によって造られました。庭園見学の順路は、植物の多様性と豊富な鳥類の観察に重点をおいて描かれています。

16. ナポリのテラス

ミニームの塔出口の左側に位置する、このテラスには数年前まで菩提樹が奥に至るまで植えられていました。この菩提樹の林が、イタリアから戻ったシャルル8世の要望により1496年に作庭された最初の庭園の形態を隠していました。ドン・パッチェロが考案した庭園は、周囲の風景に開け、居住棟から眺められる、フランスルネッサンス様式の庭園の原型を成しています。

庭園の細部の景色ジャック=アンドルー・エ・デュ・セルソーの銅版画



テラスの高台には、敷地の北東にある中世の要塞に沿って植えられた並木道がのびています。この部分は防衛のために高く造られていましたが、後に展望台となり、その下にはルイ12世の紋章のヤマアラシのリリーフが施された扉のある、小さなホールが建設されました。この展望台から、左側の要塞の向こうにある広い堀と堀の内壁が見えます。

ルイ12世の紋章、ヤマアラシ。ナポリのテラスと同じ高さにある、ヤマアラシの展望台の下で見られます。



17. 風景式庭園



河を背にして南に向かうと、昔口マン様式の庭園であった場所の、散歩道に入ります。

ここに近年、セイヨウヒイラギガシ、ツゲ、イトスギ、スタージャスミン、葡萄の木、イネ科の植物、ゼラニウム、カルドンなどの植物が再び植えられました。

庭園の中心を通る道の周りをたどって、小道が配されています。この中心の石畳の道は、昔の入口(木製格子の門があります)から居住棟にまで続いています。庭園の中のこの位置から、遠くへ吸い寄せられるように景観を望むことができ、同時に城の各箇所(礼拝堂、池、各塔の屋根など)が優雅な装飾の小細工のように目に入ります。



東洋の庭園

テラスの南東部にはレバノンのヒマヤサギが聳え、2005年に芸術家のラシッド・コーライチによって構想された、東洋の庭園が見られます。東洋の庭園は、首長アブド・アル=カーデイルの、アンボワーズで逝去した従者達の思い出を讃えるために造られました。規則的に並んだ記念碑の中を、メッカの方向に流れるように伸びる緑の線が走っています。



レバノンのヒマヤサギ 1840年

ルイ=フィリップの時代に植えられた、レバノンのヒマヤサギの太陽を遮る影の下に池が再現され、庭園に欠かせない涼しさをもたらします。水が想起させる生命精気と美的観点から、庭園には必ず池などが配されました。

冷たい風から守られている、庭園の南部にムギワラギク(カレブプラントの名で親しまれています)の帯が交差する南庭園が広がります。この菱形の区画には、シンプルで香り高い白バラが植えられています。



2番目の塔である「ウールトー塔」の向かいには、ラベンダーの畑の列が居住棟への道の両側に並んでいます。城の屋外全体が、庭園と景観の見事な融合を着想として造られており、そのためアンボワーズ王城は、2017年2月に「見事な庭園」ラベルを取得しました。

18. レオナルド・ダ・ヴィンチの胸像

庭園の低い位置には、レオナルド・ダ・ヴィンチの遺言に従い、彼が最初に埋葬されていた聖フロランタン参事会教会（11世紀のロマネスク建築）の有った場所に、カラーレ大理石に刻まれたダ・ヴィンチの胸像（アンリ・ド・ヴォレアルの作）が建てられています。



レオナルド・ダ・ヴィンチの像

レオナルド・ダ・ヴィンチの最初の墓

1519年4月23日、レオナルド・ダ・ヴィンチは公証人ギヨーム・ド・ブローーに遺言を口述しました。それによると、「遺言者は、アンボワーズの聖フロランタン教会境内に埋葬され、その遺骸は教会の司祭に運ばれることを希望する」とありました。1519年5月2日に彼は他界し、遺言書に記された場所に遺骸は埋葬されました。この11世紀の教会は、1806年から1810年にかけて取り壊されました（レオナルド・ダ・ヴィンチの胸像が、城の庭園の中の教会の元の位置を示しています）。国立高等美術学校の総監、アルセーヌ・ウセーの指揮により、1863年に発掘作業が行われ、ダ・ヴィンチの名と画家の守護聖人、聖ルカの名の断片が彫られた、碑石の近くの骸骨を発見しました。フランソワ1世の時代に使われていたイタリアとフランスの硬貨など、収集された情報を元に、アルセーヌ・ウセーは骸骨をレオナルド・ダ・ヴィンチのものであると特定することができました。ダ・ヴィンチの遺骸は、1874年に最終的にサン＝テュベール礼拝堂に移されました。



聖フロランタン参事院中央部ジャック＝アンドルー・エ・デュ・セルソーの著書「フランスの最も優れた建築物」より抜粋

写真のクレジット：

©Léonard de Serres : P4 ; P9-5 ; P10-2 ; P17-5 ; P23-1 ; P25-2,3&4 ; P26-1 ; P27-3
 ©100 millions de pixel : P5-3 ; P6-2 ; P8-2 ; P28
 ©ADT Touraine JC Coutand : P1 ; P11-3 ; P27-1
 ©Joël Klinger : P2 ;
 ©AB.FSL : P5-1&2 ; P6-1 ; P9-1&3 ; P11-2 ; P12-1&2 ; P17-3&4 ; P19-3 ; P20-1 ; P23-4

©JF. Le Scour : P10-4 ; P11-1 ; P13-2 ; P16-1,4&5
 ©FSL : P8-3 ; P9-2 ; P10-1&2 ; P14-2&3 ; P15 ; P16-2 ; P18-3 ; P19-1 ; P20-2 ; P24-1 ; P26-2 ; P27-2
 ©Basile Moriceau : P24-2&3 ; P25-1
 ©Collections windsor RL : P8-1
 ©Steven Frémont : P9-4 ; P16-3 ; P23-3
 ©Eric Sander : P13-1 ; P14-1 ; P18-1&2 ; P19-2 ; P21&22
 ©Rmn-Grand Palais/Franck Raux : P23-2



出口の各所について



-出口1：日中の見学で、旧厩舎（現在の売店）とウールトーの塔を経由する出口。



敷地の下へ降りる勾配をたどってください。そしてオランジュリー（トイレがございます）に続く傾斜路に入り、旧厩舎（Histopad©（イストパッド）のカウンターと売店がございます）を通過してください。



そこから2番目の騎手の塔である、ウールトーの塔の中に入ります。塔内では、15世紀末期の見事な「滑稽彫刻」を施した装飾部が数箇所にわたって見られます。塔の傾斜路を降りてゆくと、町の中心部に到着します。

ウールトーの塔、「滑稽彫刻」を施した装飾部



-出口2：閉場時に、旧厩舎（現在の売店）が閉まった後の出口

敷地の下へ降りる勾配をたどってください。そしてオランジュリー（トイレがございます）に続く傾斜路に入ります。そのまま傾斜をたどって、入口近くの紋章の回廊から外に出ることができます。



-出口3（身体障害者向け）：

車でお越しになったお客様は、特設されている入口から出ることができます。



電話番号 02 47 57 00 98

ヤアラシの門

オーメール公の回廊 15

ナボリのテラス 16

風景式庭園 17

ライオンの門

ツゲのトピアリー

レオナルド・ダ・
ヴィンチの胸像 18

レバンのヒマラヤ杉

カールトールの塔

東洋の庭園

庭園

ミニームの塔 14

見学者出口
展示の棟
の開始地盤

ルネッサンス様式の翼棟
(ルイ＝フィリップの居室)

王城へのアクセス傾斜路

出口

オランジュリー

居住棟入口

ガイド付きツアー
出発地点

サン・テュースール礼拝堂

ギヤルソネの塔

シャルル8世の翼棟

入口



庭園の散策路

出口

Histopad®
旧蔵舎



AMBOISE
CHATEAU ROYAL

